

2023 年後期

講義名：地域研究（東欧・バルト諸国政治）

担当教員：大中 真（法学部非常勤講師）

期末試験問題：

東欧・バルト地域を語る際に、民族問題を避けて通ることはできない。本講義で解説したことを踏まえて、東欧・バルト地域の民族問題について論じなさい。東欧・バルト地域全体を対象に論じても、どこか任意の一国もしくは複数の国を対象に論じても、どちらでも構わない。

解説：採点に際しては、以下の点を重視した。

- ① 論文形式一問なので、論理構成が整った解答は高得点となった。まず解答の冒頭で、自分で課題設定をし、民族問題の何が問題なのかを示し、その上で具体的事例を展開し、最後に結論としてまとめてある解答が高評価となった。箇条書き、事実の羅列のみの解答は高得点にならなかった。
- ② 上記の具体的事例として、理論としては(a)民族自決理論と第一次世界大戦後の適用が書かれているか、(b)東欧・バルト地域を 20 世紀初頭まで多民族帝国が支配していたこと（ロシア、ドイツ、ハプスブルク、オスマンの 4 帝国）、(c)パリ講和会議での人為的な国境画定の線引きにより国民国家が誕生したこと、(d)オットー・バウアーの文化的民族的自治理論（属人的か属地的か）を説明できること、などに触れているかが採点の基準となった。

講評：

- ① 当初シラバスでは、成績評価を期末テスト 50%、毎回の小テスト（フィードバック）50%で行うと告知したが、履修者に 4 年生が多く、就職活動による欠席の連絡が多かったこと、コロナウィルスやインフルエンザによる欠席者も複数いたことから、やむを得ぬ理由による欠席者が極端に不利にならないよう、期末テスト 60%（60 点満点）、小テスト 40%（原則 1 回 3 点満点）に比率を変更した（授業内で告知済み）。成績評価は 1 点刻みで公正、厳格に行った。
- ② 民族問題の事例として解答が多かったのは、トランシルヴァニア地方、旧ユーゴスラヴィア、バルト諸国（特にエストニア）の順だった。
- ③ 設問は「東欧・バルト地域の民族問題について論じなさい」だったが、なぜか全く別の解答をしている学生が数名おり、残念ながら落第点となった。
- ④ 授業中盤から遅刻が目立ったので、第 8 回 11 月 14 日の授業冒頭で抜き打ち出席確認をした際、遅刻せずに授業開始時刻から出席していた学生全員には 1 点加点をした。
- ⑤ 授業で案内した、12 月初旬のくにたち映画祭のエストニア映画上映会に自主的に参加し、長時間に亘り映画鑑賞とトークショーの両方に出席した複数の学生には、校外学習点として 2 点加点をした。
- ⑥ 事前連絡があり、やむを得ぬ事情により最終日のテストを欠席した学生には代替レポートを課したが、レポートの参考ウェブサイトが大学受験生向けの高校生対象のものだった場合には、減点対象とした。担当教員は高校世界史の授業を行なっているつもりはないので、大学生以上を対象とした概説書、専門書、学術論文などを参考文献としてほしい。
- ⑦ テストの解答用紙記入欄の科目名や担当者（教員名）が誤っていたり空白だった場合は、数点の減点対象とした。

以上